

桜花の記憶——法然院

あたしーの京都

河野裕子

夕闇の桜花の記憶と重なりてはじめて
聴きし日の君が血のおと

この歌の桜は、京都の法然院ほうねんいんの夕桜である。この歌を恋人に見せると、彼は「とてもいい、すごくいい」とほめてくれた。それがうれしくて、夜も昼もせつせと歌を作り溜めた。角川短歌賞に応募してみようと思っただのである。昭和四十四年二月のことだった。一首一首を短冊のように切り抜いて並べ替え、五十首をなんとか構成し終わったのは、締め切り日の明け方近くになってからである。雨戸をあけると少し風が吹いて、雪が降っていた。冷たい畳のうえに、雪が吹き込み、なんども歌の切り抜きを吹き飛ばした。タイトルは初めから決まっていた、大判の原稿用紙に「桜花の記憶」と書く、もう憑きものが落ちたよう

な気がした。

折から大学の後期の試験に重なっていたが、勉強はせずに歌ばかり作っていたため、落としてしまった科目もあった。応募したことも忘れかけていた四月の初め、受賞の電報が届いた。生まれて初めてもらった電報だった。

法然院は、京都市左京区鹿ヶ谷しかがたにある。銀閣寺から若王子わかおうじへの疎水そすいべりの道は、哲学の道と呼ばれ平日でも人通りが多いのだが、この道を一筋東へ入ると法然院がある。静かである通りもあまりない。この静かさが好きで学生の頃は法然院へよく行った。法然院というより、その右手に位置する古い墓域と、その後ろに広がる如意ヶ嶽にょいがたけの山麓さんろくを歩きまわった。春から初夏にかけての、むせかえるような山の若葉の匂いを忘れることができない。

結婚して東京に住んでいた私たちが京都に

帰ってきたのは、昭和五十一年十一月のことだった。東京には五年暮らした。つれあいの永田和宏ながたわひろが大学に戻って研究をしたいと言いだしたからである。三十歳になったら踏ん切れなくなるからと言いだしたとき、彼は二十九歳であった。私自身、東京での暮らしに耐えきれなくなっていたこともあった。あとひと月勤めればボーナスも入るのに、そんなことすら考えなかった。三歳と一歳半の子供がいた。大学に戻るといっても、無給である。将来に何の保証があるわけでもなかった。今から考えると、むちゃくちゃな話である。若さの無謀さというか、若さの勢いというか、ただ単に二人とも世間知らずだっただけなのかもしれない。

五年ぶりの京都の冬はひどく寒かった。寒いうえに侘わびしかった。そんなある日、私た

ちはなぜともなく法然院に出かけていった。夕闇の桜花の歌を作ってから十年ちかくが過ぎていた。

法然院の参道をのぼった。右に折れると墓地に入る。入り口に大きな三重の塔の石塔があり、石塔の右横に桜の木があるはずだった。ところがその時、そこにあったのは大きな楠の木である。桜の木は無かったのである。何が何だか訳がわからなかった。私のこのころの底には、夕闇の桜の記憶が沈みこんでいて、それは法然院の石塔の右横の大きな桜の木だった。どこでどう思いちがいをしてしまったものか。あつたはずの桜の木が無かったことを確認してもそれでもその後もずっと私のこのころの中には、桜の木はあり続けた。

こんどまた法然院に行きたくなつたのは、梅原猛の『法然の哀しみ』を読んだことがき

つかけだった。昨秋から体調を崩し、昼間も寝てすごすことが多くなつたが、そんな折り、ポツリポツリと『法然の哀しみ』を読み続けた。こんな病気をすることでもなければ、七百ページもある大著を読むことはなかっただろう。病気の不安と、思うようにならない身体の痛みの中で、私はこの著に慰められた。

何年も京都に住んでいながら、法然にゆかりのある東山の知恩院も、京大に面した百万遍の知恩寺も見すごして来てしまったことに気づかされた。

今回訪れたのは二月の初め、大寒がすぎたばかりの一年中でいちばん寒い頃であつた。法然院の境内には人は誰も居らず作務衣の掃除の人が居るだけだった。茅葺門をくぐると、しっとりと静かな石畳の道となる。道の両側に長方形の砂が盛りあげてあり、流水と梅が

くつきりと砂の上に浮き出ている。白沙壇と呼ぶそうだ。冬枯れの中の石塔を見あげても、もはや若くはない私には、二十年前のような驚きも感傷もない。今まで何度となく見て来た石塔が、阿育王の石塔であることに改めて気づく。「摹倣／江州／阿育／王塔」と四行に分けて彫つてある。「江州の阿育王の塔に倣い摹す」とでも読めばいいのだろうか。

二十二歳で角川短歌賞を受賞したことが、今から思えば私の人生の始まりだったのかも知れない。法然院の夕桜の歌がなければ賞に応募することもなかっただろう。法然院に桜の大樹はないが、若い日に、たった一度きりの桜の花を見たことはほんとうである。夜ふけ、灯を消した湯ぶねに浸り目を閉じていると、若い日に見た桜よりずっと鮮やかに見える桜があつた。かわの・ゆうこ「塔」選者

